

生活保護家庭に育つペルー系 ニューカマーの子どもの将来展望 ——「親子関係」と「重要な他者」に注目して

坪田 光平 職業能力開発総合大学校特任助教

キーワード：ペルー系ニューカマー，生活保護家庭，将来展望

日本社会でアンダークラスを形成し貧困に陥るリスクが危惧されてきた南米系ニューカマーのうち、本稿ではペルー系ニューカマーに注目した事例研究を行う。ペルー系ニューカマー家族が経済・言語・関係面にわたって困難を抱えている可能性に注目し、とくに生活保護家庭に育つ子どもたちの将来展望を検討した。分析の結果、1) 生活保護家庭であっても親の教育期待の高さが見られた一方、子どもには通訳を要求しない場合から、病院への付き添い兼通訳、さらには滞納家賃・水光熱費をめぐる日本人との交渉役割を任される場合まで見られ、親が子どもを頼りにするほど親子の役割逆転が生じやすいことが明らかになった。しかし2) 通訳を依頼されることに対しては反発が見られず、むしろ子どもたちは日本語とスペイン語の双方に長けていることを肯定的に捉えていた。このため、3) 二言語能力を維持・伸長する観点から「親族」や「教会の同国人」を子どもたちは「重要な他者」と捉え、海外大学への留学と通訳者としての将来展望が見られた。一方、日本人との交渉役割が要求される場合では、過大に意識される家庭内役割から親への反発が生じ、家庭からの離脱とそのための手段として早期就労意欲が並行して語られた。親子関係を中心とする早期就労の道筋がブラジル系ニューカマーとは異なる点を指摘しつつ、親子関係に留意した今後のエスニック集団間比較の必要性を指摘した。

1 問題の背景

1980年代以降、アジア圏や南米圏を中心に「ニューカマー」と呼ばれる外国人の数は着実に増加の一途をたどっている。1990年代以降、外国人集住地域では日本語を母語としない南米系ニューカマーを多数受け入れたことから、初期のニューカマー教育研究では日本の「学校現場」を中心に同化主義的な学校文化のあり方を問題視しつつ（太田，2000）、不就学や学業不振、さらには高校進学の問題を問題としてきた（宮島・太田，2005）。さらに2000年代以降は学業達成に踏み込んだ研究として、渡日年齢（鍛冶，2007）や家族の教育戦略（志水・清水，2001）、日本の教育制度（佐久間，2006）、トランスナショナルな家族（額賀，2012）に注目した研究が積み重ねられ、徐々に増える大

学進学者についても、その背後要因に関心が集まりつつある（額賀・三浦，2017）。しかし国勢調査をもとにした近年の研究（鍛冶，2011）によれば、とくにブラジルとペルー系ニューカマーの大学在学率は2000年段階で0%程度に過ぎず、ニューカマーの大学進学過程を検討するにはエスニック集団の違いに目を向けるべきことが示唆されている^{*1}。

こうした研究潮流を踏まえつつ、本稿では「大学在学率の低さ」を生み出していると考えられる一要因として、ニューカマー家族の「貧困^{*2}」に焦点を当てたい。これまでニューカマー家族が経験する貧困については、とくにブラジル系ニューカマーを中心に論じられてきた。例えば児島（2008）は、ブラジル系ニューカマーが「度重なる移動」によって剥奪経験を有するだけでなく、学校からの排除経験をも通じて早期就労へと水路づけられていることを明らかにしている。こうした早期就労のプロセスをもとに、かれらは将来的に「貧困層へと転落するリスク」（以下、貧困リスク）を抱えているとも指摘されてきた（樋口，2011）。ブラジル系ニューカマーの貧困リスクに関して、小内（2009）は「いつ失業するかわからないような不安定な就業形態で生活を維持し続けなければならない」（小内，2009：59）ことをかれらの貧困リスクと捉えるべきと提唱しており、とくに経済面での貧困は子どもたちにも影響を及ぼし「貧困の世代的再生産」が起り得ることに警鐘が鳴らされている。

もちろんニューカマーの貧困については、これまで日本人男性と離婚したフィリピン人女性や、中国残留日本人孤児についても一定の蓄積が見られてはいる（高谷・稲葉，2011；浅野，2009）。しかし南米系ニューカマーを対象とした研究はブラジル系ニューカマーを中心に論じられ、他の南米系ニューカマーを対象とした研究はもちろん、子どもたちがどのような貧困リスクを背負っているかについては研究蓄積が乏しい状況にある（山野上，2015；福田，2015）。後述するように、本稿で取り上げるペルー系ニューカマー家族は単に経済面での貧困にとどまらず、言語・経済・関係面にわたった複合的な貧困リスクが指摘できる。こうした状況を踏まえたとき、そもそもペルー系ニューカマーの子どもたちがどのように家族を経験しているかにまず注目する必要があるだろう。そしてその作業を通じて、早期就労へと水路づけられるプロセスが「頻繁な移動や学校での排除経験」といったブラジル系ニューカマーとどのように異なるかが明らかになるだろう。

2 先行研究と検討課題

本節では、国内に住むペルー系ニューカマーに関する先行研究を概観しながら、本稿の検討課題について提示したい。まず、2016年末時点の在留外国人について集計した法務省「在留外国人統計」によれば、日本に滞在するブラジル系ニューカマーが18万923人を数えるのに対し、ペルー系ニューカマーの量的規模は4万7740人となっていることが確認できる。注目したいのは、リーマンショックを経験してもそのほとんどが日本滞在を選んでいったことから、着実な「定住化」が指摘されているということであり（高谷ほか，2015）、「頻繁な移動」を特徴とするブラジル系ニューカマーとの差異が示唆されている。一方、ペルー系ニューカマーの居住特性については、関東圏に集中しつつも「集住地域が極めて少ないこと」が特徴とされているように（柳田，2012）、ペルー系

ニューカマーの关系的資源には居住地域による構造的制約が強く働くことが指摘されている^{*3}。また経済面に関する全国調査データは存在しないものの、静岡県が独自に実施した調査結果によれば、ブラジル系ニューカマーよりもペルー系ニューカマーに経済面で多々不利な状況にあることが報告されている^{*4}。例えば上記の調査結果のうち滞日10年以上に対象者を限定すると、双方の間には年収50万円未満（ブラジル6.3%，ペルー19.4%）と年収100万円未満（ブラジル9.8%，ペルー24.1%）の割合比となっていることから明確な違いが認められ、「ペルーは、他の国籍と比べると全体として低所得の割合が高く、世帯年収350万未満が9割を占める」（千年，2011：52）状況にあるのである。

さらにペルー系ニューカマーの言語面を捉えるうえで重要なのが、その歴史的経緯である。すなわち、来日したブラジル系ニューカマーは高い割合で日本語能力を維持・継承していたものの、ペルー系ニューカマーは日本政府との国交断絶と並行して現地社会での交婚と多人種化が歴史的に進行した事実が特筆できる（Takenaka, 2004）。そして現地社会への同化が進むなか、ペルー系ニューカマーは南米系ニューカマーの中で最も日本語能力の保持に乏しいことが報告されており（国際協力事業団，1992），来日後は日本語能力の高いブラジル系ニューカマーを頼りにしつつ、様々な資源へのアクセスに困難を抱えることで、職業選択をはじめ日本での上昇移動は主観的に閉ざされてきたことが経年的な調査研究から明らかにされている（Takenaka, 2009；Takenaka and Paerregaard, 2012）。こうした知見を通じて重要なのは、ブラジル系ニューカマーとの差異として、少なくとも言語・経済・関係面にわたってペルー系ニューカマーが複合的な貧困リスクを経験しているという示唆である。無論、すべてのペルー系ニューカマーが貧困を経験していると考えるのは早計だろう。しかし、日本政府がニューカマーの子どもの貧困や暮らし向きに関する公式統計を欠いてきた現状においては（大曲・樋口，2011：79），さしあたりペルー系ニューカマー家族が複合的な貧困リスクを経験する可能性に留意しつつ、細かな事例研究とその蓄積が求められているのではないだろうか。とくに子どもたちが経験する貧困の分析として肝要なのは、単に経済面での貧困を前景化させるのではなく（志田，2015），むしろ子どもたちがそもそも高校進学・卒業という特定のライフステージを超えて、広く他者との関係の中で自分の将来をどう捉えているのか（＝将来展望の形成）ということである。というのも、子どもの貧困研究が明らかにしてきたように、生活保護家庭に育つ子どもの将来展望が制約される傾向にあるという知見を踏まえれば（大澤，2008；小西，2003），冒頭で示す「大学在学率の低さ」にかかわった知見も析出されと考えられる^{*5}。

ではペルー系ニューカマーの子どもの将来展望はどのように捉えられるだろうか。子ども視点から注目できるのが、「親子関係」と「重要な他者」の存在である。ペルー系ニューカマーは親の言語能力に制約が多々見られるものの、子どもに対する親たちの大学進学期待は共通して高い傾向にあることが報告されている（田巻・スエヨシ，2015；Matsuda and Derek, 2016）。もちろん、上述した大学在学率の低さは確かに指摘されるものの、大学進学を果たした事例が決して見られないわけではない。例えば大学進学達成者について検討している角替（2016）は、ペルー系ニューカマー親子には日本語能力の高さに違いが見られた一方、子どもたちが共通して「親への尊敬の念」を抱いており、安定した親子関係の形成が見られることを明らかにしている。ここで注目したいのは、安定した親子関係と並行して大学進学意欲の形成に学校の教師や支援団体をはじめとする「重要な他

者」との出会いが多々影響を与えていたことである。田巻・スエヨシ（2015）においても、家庭内における「母親」の存在、さらには「同じペルー人」をはじめとする「重要な他者」との出会いの重要性が明らかにされており、こうした関係面での資源獲得は、ペルー系ニューカマーの子どもに限定されず、広くニューカマーの子どもの将来展望に重要な役割を果たすことが明らかにされてきた（徳永、2008；三浦ほか、2016）。

しかし、大学進学過程における「重要な他者」の影響は、言語・経済・関係面にわたって複合的な貧困リスクを経験しうるペルー系ニューカマーの将来展望に対し、どれほど独立した影響力をもちうるのかは依然として検討の余地がある。ここで参考になるのがアメリカ移民第二世代を扱った研究である（Portes and Rumbaut, 2001）。ここでは「英語力」といった親の言語的資源が乏しくホスト社会への適応が困難な場合、親が通訳代わりに子どもを使うことによって親子関係には「役割逆転」が生じやすいことが明らかにされている。それはすなわち、子ども視点からすれば、ホスト社会に慣れ親しんでいく過程で次第に親を見下し、親子関係に緊張や葛藤が生じていくことを示している。こうした親子関係の様相は、親子の間で言語状況の不一致が生じない、生活保護家庭に育つ日本人の子どもを扱った研究においては見られない。むしろ林（2016）は、生活保護家庭に育つ子どもたちが日常的に家事役割を親から要求されており、実際に「遂行できる自分自身／家庭内」に自己アイデンティティを形成していること、そして、拠り所となる家庭内は子どもたちの自己アイデンティティを保障する「居場所」として機能することを指摘する。ここからは、生活保護家庭という点での共通性と同時に、とくにニューカマー家族の言語状況の差異に留意した分析の必要性が指摘できる。すなわち親世代が日本語能力に困難を感じ、また経済的・関係面においても困難を経験しているとすれば、ペルー系ニューカマーの子どもたちは、通訳として頼られることを通じて次第に親への反発を覚え、むしろ家庭からの離脱を通じて早期就労へと水路づけられていく点で複合的な貧困リスクを背負うのではないだろうか。そのことは、家庭からの離脱を促し、進学意欲を挫くだけでなく早期就労意欲を強めるよう将来展望にわたった影響力を持つとさしあたり仮説化できるだろう。加えてこうした仮説は、ブラジル系ニューカマーとの差異として別様な早期就労の道筋がありうることを示唆するものでもある。以上から本稿では、親子関係に注目した上記の仮説を念頭に、以下二つの研究課題を設定して分析を行っていく。

- 1）貧困家庭に育つペルー系ニューカマーの子どもたちは、どのような親子関係を経験しているのか。とくに通訳経験による「親子の役割逆転」に注目して明らかにする。
- 2）貧困家庭に育つペルー系ニューカマーの子どもたちは、自らの将来をどのように展望しているのか。とくに「親子関係」と「重要な他者」の交差に注目して明らかにする。

既存研究では、大学進学を達成した層が「安定した親子関係」と「重要な他者」を基礎としていたことを示しているが（角替、2016）、本稿では「重要な他者^{*6}」の影響を考察するために、親子関係にバリエーションが見られた事例をもとに検討を行う。以下、調査概要と方法について説明し、ペルー系ニューカマーの子どもたちの将来展望を考察していく。

3 調査概要と方法

本稿では、南米系ニューカマーが多く見られる都市近郊X町で実施される学習支援教室（F教室）で行ったフィールドワークの結果をデータに用いている（2016年6月～2017年3月末まで）。先に、F教室（週1回）を取り巻くX町の地域背景について簡単に示しておく^{*7}。強調すべきは、X町は都市近郊に位置しているということであり、外国人住民割合が高い外国人集住地域という点である。X町の外国人住民は南米系ニューカマーのほかにもアジア圏出身者から構成されており、F教室には日本人の子どもたちに加えニューカマーの子どもたちも足を運んでいる。またこうした背景には、機械部品加工会社に象徴される、製造・運搬業に関わる工業地帯がX町周辺一帯に広がり、外国人労働者を雇用し続ける産業構造が影響している。外国人集住地域としての色彩を帯びるX町には、外国語が使用可能なエスニック教会が見られるだけでなく、飲食店を中心とするエスニック・ビジネスの展開も見受けられ、エスニックな制度的基盤を有していることも指摘しておきたい。こうしたX町を背景に筆者は2016年6月15日から2017年7月末にわたって学習支援スタッフの一員として、主に高校進学を控えた中学生の学習支援を担ってきた。その際、学習支援だけでなく時に子どもたちが語る家庭内での経験に耳を傾けてきた^{*8}。

本稿ではそうした子どもたちとの関係を踏まえ、中学生3名^{*9}の事例を集中的に検討していく。後述する3名を選定したのは、親からの「通訳依頼」の程度と「重要な他者」との関係にバリエーションが見られ、「重要な他者」の影響を検討する本稿の立場に照らして最適と考えたからである。なお検討に際しては、2016年度末までの事例に限定して、F教室を通じて記録したフィールドノート（FN：ゴシック表記）を分析の対象とした。

4 ペルー系ニューカマーの子どもたちにとっての親子関係と将来展望

本節では先に3名（P1、P2、P3）の中学生について説明を加えたうえで（表1）、それぞれの事例について詳細に検討していく。表1で示す3名に共通するのは、いずれも①一貫して生活保護を受給する母子家庭に育っており子ども（きょうだい）が複数名いること、②家庭内言語はスペイン語に統一されており親から向けられる教育期待が総じて高いこと、③幼少期から親に連れられ、子どもたちはスペイン語が使用される教会に頻繁に足を運ぶ習慣が見られたことである。一方、3名の親たちは日本語で意思疎通する言語能力に不安を表明しており、子どもたちが学校で学ぶ学習内容に対しては直接的な支援が困難となっていた。分析対象としたペルー系ニューカマーの子どもたちの将来展望を要約的に表現すれば、以下の三パターンに集約される。第一は、親から通訳依頼がなされることなく大学進学に高い価値が与えられ、海外就労するきょうだいを模範としながら大学進学／海外留学を希望していく将来展望のパターン（P1）。第二は、病院等の付き添いといった通訳依頼がなされながらも、教会で出会う同年代のペルー人を模範に大学進学／海外留学を希望していく将来展望のパターン（P2）。第三は、親から通訳依頼があっただけでなく、未払い家賃・水光

表1 分析対象とする生活保護家庭に育つペルー系ニューカマー中学生

子ども	P 1	P 2	P 3
来 日	幼少期	日本生まれ	日本生まれ
性 別	女	女	男
家 庭	母子家庭	母子家庭	母子家庭
家庭内言語	スペイン語	スペイン語	スペイン語
大学進学意欲	あり	あり	なし
将来職業	通訳	通訳	工場労働
子どもへの通訳依頼	ほぼなし	頻繁	頻繁
子どもへの教育期待	非常に高い	高い	高い
母親の就労状況	無職	無職	無職
海外在住する家族	あり	なし	なし
所属する教会の言語	日本語とスペイン語	日本語とスペイン語	スペイン語

熱費をはじめ日本人相手への交渉役割までも子どもに依頼された結果、家庭内からの離脱と早期就労を志向していくパターンである（P3）。子どもたち全員が日本語とスペイン語に高い価値を与え、「通訳」を希望する点で共通性が見られたものの、親子関係の様相に応じて将来展望の様相はそれぞれ異なっていた。以下、順に検討する。

(1) P1の事例：海外在住のきょうだいを媒介とした将来展望

まずP1の事例について検討する。日系ペルー人にあたるP1家族について特徴的なのは、母親の教育意識が高く、子どもに対して非常に過保護的な姿勢を見せていたことである。

日本から海外留学を経験しているきょうだいと比較して、母親は、P1も「まずは高い学業成績を収められるように」と子どもを監督する立場に身を置き、例えばP1には①携帯電話を所持させない、②家の中であっても（固定電話で）一人で友人と話してはいけない、③どの教科も手を抜かずに勉強する、といった複数の教育方針を家庭内で徹底していた。

このためP1は「全部の教科を予習・復習しなきゃいけない」と繰り返しスタッフに漏らしたり、F教室が始まる前から、既に勉強していたりする光景が頻繁に観察された。注意したいのは、母親は単に口うるさくP1に指摘するだけに終わらないということである。実際、母親は毎週欠かすことなくP1を迎えにF教室まで出向いており、スタッフと会話するなど、熱心にP1の学習状況を支えようとしていた。また学業に邁進するP1の振る舞いとして強調したいのは、F教室に通う他の子どもたちが携帯電話を所持しているのを見ては「ただ遊んでいるだけ」「本当あり得ない」と指摘し、消費的なメディアに浸る他の子どもたちと自分を差異化するだけでなく、見下す姿勢をも見せていたことである。

P1は、休憩時間になると教会の讃美歌を口ずさみつつ、「先生、私はヤンキーにはならないです」「あの人たちはやばいですよ、本当やばいですよ」と話しかけてきた。携帯電話で動画や音楽を流し、勉強不熱心に見える他の中学生に視線を幾度も投げかけては「ありえない」とため息交じりに肩を

落とした。筆者が「休憩時間でもダメなの？」と答え、P1は「教会じゃ、悪の道に染まっちゃいけないって言うんですよ？」と主張し、そのことはお母さんから厳しく言われているのだという。(FN: 2016年12月21日)

教会が教育的役割を持つことは、フィリピン系ニューカマーの子どもの育ちにおいて無視できない重要な要素として言及されている(三浦, 2015)。また在米ベトナム系難民においても、たとえ親の人的資本が高くなくとも、親たちは子どもの教育に向けて教会の場を利用しては結束を固め、ホスト社会の都市下層文化に同化しないよう監視の目を強めていくことが知られている(Zhou and Bankston, 1998)。上記の言動からは、母親からの統制が教会の場と整合するものとしてP1に確認されていることが窺え、実際、母親に連れられて頻繁に教会に参加することを通じて学業重視の価値観を内面化していることが指摘できる。P1は母親を「厳しい人」と捉え、監視の視線を投げかける親に対して時に不満の声を漏らすこともある。しかしP1は、後述する2名と比較して親子の役割逆転を何ら経験しておらず、学業努力を継続している点が特筆できる。

しかし上記の文脈を踏まえても、P1は中学校の五段階成績評定で「3」が平均して並んでおり、学校内では上位に位置するほど高い学業成績を収めているわけではなかった。このためP1は、塾に通えない自分を卑下し中学校にいる「日本人は天才」なのだと指摘する。しかしそれでもP1はスペイン語の読み書きが維持されていることに自信を持ち、とくに将来展望にあたっては海外在住するきょうだいの存在が大きいことを語った。

お母さんはX語が少しできて…でもY語も学びたかったんだって。だからお兄ちゃんはX語が学べる国、お姉ちゃんはY語が学べる国に留学しているんです。…お母さんの言葉の夢は上のきょうだいが叶えているから。私は、だったら大学でスペインに留学して、日本語と、スペイン語ももっとマスターして、通訳とか言葉が活かせる仕事ができたらなって。(FN: 2017年1月11日)

P1の将来展望の語りが示しているのは、海外に在住するきょうだいを「重要な他者」と位置づけることによって、大学進学を前提にした海外留学が強く意識されていたことである。国内で完結的な日本の進路指導状況を見据えたとき、海外生活する親族の存在は無視できるものではない。そのことはP1においても同様であり、無料の国際電話やスカイプを通じて日常的に維持されている「トランスナショナルな家族」(Foner, 2009)は、彼女の将来展望において欠かせない要素として言及されていた。たとえ塾に通えなかったり高い学業成績を収められなかったりしても、こうした家族成員に組み込まれることを通じてP1は「通訳になりたい」と自分の将来展望を語るのである。このように、P1を取り巻く家族のあり方は、他の日本人生徒と自らを差異化し、自らの言語能力に自信や誇りを持たせながら彼女の将来展望の形成に貢献していた。

(2) P2の事例：教会の同年代を媒介とした将来展望

次にP2の事例を検討する。日系ペルー人の母親は、母子家庭として複数人の子どもを育てており、P2家族では、P1家族と同様に家庭内ではスペイン語が使用されている。

P2家族で注目したいのは、前述のP1家族とは異なり、親から通訳依頼が多々見られた点である。P2は度々、まだ幼いきょうだいの面倒を見なければならぬと強く語っただけでなく、母親が病

院等に赴く際には母親の通訳として付き添って学校を休むことが常態化してもいた。きょうだいの面倒や親の通訳を含むこうした家庭内役割に、P2は「でも断れない。家の仕事だから」と語るものの、部活動に支障が出てしまったり交友関係にも影響が出てしまったりする現状を嘆き、さらには授業参観時に派手な服装で来校する母親に抵抗感を持ち「ピエロみたいなのがある」と形容したりしていた。P2は「先生（＝筆者）が代わりに授業参観来てください」と話しその役割を要求してもいたが、ここからは、P2が拘束的な家庭内役割を一方では仕方がないものとして受容しつつも、「母親を遠ざけたい」という心情との狭間でP2が葛藤を経験していたことが指摘できる。P2のこうした現状は、しかしそれでも親子の役割逆転を招くものではなかった。毎回のようF教室に参加していたP2は、日本語に不慣れな母親を完全に見下すのではなく、むしろ「通訳としての経験は将来に役立つ」と徐々に捉え、スペイン語能力を誇らしげに語っていたのである。ここで重要なのは、P2の背景に、同じ教会に通う「同年代のペルー人の女の子」の存在が模範となり、大学進学と並行して「通訳」としての将来展望が見られたことである。

教室の企画として予定されていたイベントに関して、既にその日は教会が入っており、家族で過ごさなければならないことをP2は伝えてきた。X町の教会についての話題になり、「日本人のおじいちゃん、おばあちゃんも普通にいっぱいいるよ?」と話してきたものの、教会にはペルー人が多く集まってくることを教えてくれた。なかでもP2が「すごー格好いい!」と話すのが、その教会で同時通訳を務めている同年代の女の子の存在だった。神父がスペイン語で話した内容を、即座に堂々と日本語に通訳してみせる様子は非常にクールなのだという。「あれくらい出来るようになりたい」と話すP2は、日本語とスペイン語の両方を武器とし、そのブラッシュアップのために母親の通訳をこなすことは、むしろ「ためになる」のだと真剣に伝えてくれた。…「同じペルー人を助けたい」と話すP2は、スペイン語と日本語だけでは不十分と考え、大学では英語圏へ留学したいとも強く語っていた。(FN: 2016年12月14日)

P2の教会にまつわる語りから指摘できるのは、一面的にはP2が親との関係に葛藤を経験していたものの、身近に参照できる他者を媒介とすることによって、大学進学を見据えた将来展望の形成が可能になっていたことである。実際、後述するP3の事例では多くの科目で「1」の成績評定がついていたのに対して、提出物をこなしているP2の学業成績は、P1と共通して「3」が平均的に並んでいた。P1と比較する視点からは、子どもを通訳として駆り出しP2に登校を中断させる点で両者に明らかな違いが見られたものの、海外在住のきょうだい(P1)や教会参加者(P2)がともに「重要な他者」となっていた点では共通し、それが彼女たちの大学進学意欲を生み出す原動力となっていたと指摘できる。

(3) P3の事例：親子の役割逆転と早期就労意欲

最後に、大学進学意欲という点で拒否の姿勢を示したP3の事例を検討する。P3の家族は、これまでの2名の事例と同様に母子家庭であり、教室には下のきょうだい(P3-1)と一緒に参加している。一方、P3の上のきょうだい2名(P3-2とP3-3)はそれぞれ高校で不登校になって中退しており、P3-2とP3-3はそれぞれ非正規雇用の身分で就労している。

高校進学を控えるP3の第一の問題は、親子関係が良好ではないということである。日本語教室に断片的に通いながらもほとんど日本語能力が伸びないという母親に対し、P3は「発音がやばい。本当変だから。恥ずかしい」と述べる。そうした母親は、P3に対してしっかりと勉強するようにと、ベルトで叩くといった厳しいしつけを行ってきた。一方、現在では別のペルー人男性と恋仲になり、夜になって家を不在にしたり、食事を作らなかつたりすることが不満としてP3から語られる傾向にあった。P3にとっての目下の不満は、上のきょうだいがそれぞれ家から出ているため、自分が親の通訳を担当しなければならないこと、また、母親が主導で引き受けた知人の子ども（乳児）の面倒を見なければならず、夜になっても乳児が寝付いてくれないため生活スタイルが夜型になり、度々学校を休んでしまうことにあった。こうした生活スタイルは弟のP3-1についても同様であり、乳幼児の子守に付きっきりで「起きたら朝10時だった」と語られる状況がしばしば見受けられた。親不在というこうした家庭内では、親子関係が危うくなるだけではなかった。

教室にきたとき、気がかりだったのが彼の服装。ワイシャツの胸ポケットの糸が切れてしまっていて、半分ほどポケットがむき出しの状態になっていた。ワイシャツも全体的に黒ずんでおり、インナーのシャツも土まみれで、とくに「襟」が非常に不衛生な印象を受けた。そのほかにも、使用している鉛筆は、短く、すぐ折れてしまいそうな状態だった。（…突然）別の子どもが「年齢のある人はその分長く生きているからすごいことなんだよ」と全体に向かって話した時、P3は、ぼそっと「先生、俺、親のこと尊敬してない…」と話してきた。親のことを口に出すのが珍しかったので、「どうして？」と尋ねると、彼の口からは「親はほとんど家にいない」「掃除をしないから家が汚い」「（目の前の机を指して）家に勉強机が欲しい」「散らかっているから床で勉強するしかない」「（プリントを入れる）ファイルが欲しい」「家では勉強したくない」といった言葉が出てきたのだった。その時、P3は目に涙を浮かべており、彼が学習に向かうときの基本的な学習環境が十分に整っていないこと、親からのサポートが非常に手薄な状況にあることが判明した。また、18時45分頃には「お腹が空いた」といい、「今日は何を食べるの？」と聞いてみると、暗い表情で「何かあるかわからない…」と発言していた。小さな声で誰にも聞こえないよう私（＝筆者）に耳打ちしてくる彼の言動からは、学習用具といった物的な資源の不足、親業の不在、学習環境の欠乏といった問題群が示されると同時に、それを周囲には「知られたくない」という意思表示が含まれていた。（FN：2016年7月6日）

学校のプリントを入れるファイルさえないと語る彼が見せてくれたカバンの中身は、破けたプリントが雑多に詰め込まれており、テスト時に提出する課題プリントも紛失し「未提出」が常態化していた。こうした問題は学業成績の低さと絡んで学校側から多々指摘される事実となっており、実際、親の通訳が付いた三者面談の場において、P3は「行く高校がない」とさえ担任教師から伝えられてもいた。その後、P3は「塾に行きたい」と母親に進言するものの、母親からは「お金がないからダメ」と回答されたと打ち明けていた。

この事例から指摘したいのは、まず母子家庭であるということ以上に、親の日本語獲得をはじめホスト社会への適応が高いハードルになっているということである。例えばフィールドワーク中、P3の母親はP3の不満に理解を示し、自身の日本語能力や金銭的なゆとりのなさから塾に通わせ

られないことを申し訳なく思っていると筆者に表明しただけでなく、時折F教室を訪れては心配してP3が勉強する姿を眺めたり、軽食を差し入れたりする場面も見受けられた。もちろん、P3が語った不満は、経済面での貧困の表れとして理解ができ、それは日本人家庭と同様の現象として理解しうだろう。しかし子ども視点からすれば、日本語を十分に理解せず常にP3を通訳として駆り出したり、度々家を不在にしたりするといった親の振る舞いは、思春期にあたる子どもから反感を買うことで親子関係を危うくしていた。とくにP3が繰り返し「不満」として語った点として強調したいのは、アパートの「家賃や水光熱費の支払いが滞っていること」をめぐって、日本語が分からない親にかわって日本人側に説明したり交渉したりしなければならなかったことである。それでもP3は、P1やP2と同様、抵抗はありつつも親からの依頼を拒絶することなく引き受けていた。しかし重要なのは、こうした役割の遂行がP3にとって「過大」となり徐々に不満として映っていくことである。そしてそのプロセスと並行して、P3は家庭内を拠り所とするよりは、むしろその場からの離脱とその手段としての早期就労を志向していた。

【筆者発言：以下同様】…高校はどこにする？）P3：X高校。（〇〇科と普通科があるよね。どっちなの）P3：わかんね。でも通ってダメだったら学校辞めて働く。（高校は卒業しないの？）P3：高校は卒業したい。でも大学はダメだから。（どうして）P3：そもそも金ないし、行かないって思ってるから。昼は働くし。…久しぶりにF教室に足を運んだP3に対して、筆者は別室で最近の事情を聴いた。焦りの表情を浮かべて「働く」と言い放った彼の瞳は、会話が進むにつれて一気に暗く沈んでいった。諦めにも似た表情を浮かべたP3は、お金がない自分の家庭では大学進学がそもそも選択肢に入っていないと強調し、「家賃が3か月分未納」であることをめぐって通訳に駆り出されていた事情を説明してくれた。賃金未払いに関係した通訳経験はこれまで幾度もあると彼は語ったが、それは「ホント嫌だけど当たり前」なのだという。…嫌な家の役割から解放され、家庭から出て早く働きたいというP3に「それでいいの？」と尋ねると、「上のきょうだいもまあそんな感じだし、別にいいじゃん」とのことだった。（FN：2016年12月21日）

これまでの事例と対比を成すP3の語りに関してまず整理すべきは、P1やP2と同じように「教会に通う」という点で三者は共通していることである。しかし、P3が通う教会はすべてがスペイン語であり、また参加者はP3の親と同年代によって構成されているという。そのため、P2が言及したような「日本語とスペイン語を同時通訳する」存在はなく、P3は「教会ではご飯が食べられること」以外の意味を付与していなかった。またP1が「海外在住のきょうだい」を将来展望の形成にあたって見習うべき存在と位置づけていたものの、P3のきょう代いは既に高校を中退しており、P3にとっては親元から離れることを達成した存在として参照されていた。無論、それがP3にとって積極的な意味での「選択」であるならば、早期就労という将来展望を否定的に価値づけることはできないだろう。しかし以下に示すように、その「選択」は必ずしも思案された結果ではなかったのである。

（確か上にきょうだいがいるんだよね？）P3：高校中退してるけどね。（勉強のこととか、進路のこととかは相談しないの？）P3：俺よりもさらに勉強できないから。かけ算も微妙だし。俺よりも全然出来ない。（じゃあ、お母さんとかには？）P3：しないしない。しても意味がない。（上のきょう代いはい

ま何をしているの?) P3:働いてる。運ぶ奴とか。工場とか。(じゃあ、体を使うお仕事か) P3:そうそう。だから自分で。…まあ工場とかかな。(なんで工場なの?) P3:工場かコンビニくらいしかわかんね。とりあえず家から出られればいいじゃん?…本当は同じペルー人だしP2みたいに俺も通訳になりたいよ? 勉強一緒にして楽しいし。でもP2の親は通訳頼んでも家でご飯作ったりちゃんとしてんじゃん。俺の親は全然違うから。違う。家賃とかの通訳とか、重い。だったらとりあえず早く家出たいじゃん。(FN:2017年2月8日)

ここで強調しておきたいのは、学習や後の進路に関してP3は頼りにならない母親や上のきょうだいを悪い「模範」と理解する一方、同じ学校・学年でもあるP2と勉強するのは「楽しい」と捉え、P2に触発されながら「俺も通訳になりたい」と語っていたことである。しかしP3は「P2と自分の親との差異」に対して敏感になり、通訳としての将来展望を退けていった。もちろん、「早く家出たい」と意思表示するP3は、筆者とのやり取りを通じて「工場かコンビニか」という選択肢の狭さについては十分自覚的であった。しかしそれでも、日本人を相手にする未払い家賃や水光熱費の交渉役割が徐々に「重い」と捉えられることを通じて、家庭からの離脱こそが強く優先されていった事実注目する必要があるだろう。つまりP3の視点からは、負担として意識される家庭内役割からの解放を「とりあえず」優先的に志向していった結果、きょうだいを通じて身近に参照される工場労働が消極的に「選択」されていったと整理できる。P2の親と「全然違う」ことに意識的なP3は、「将来の経験として役に立つ」として通訳経験を読み替えていくのではなく、家庭内からの離脱を目的とし、その手段として早期就労という将来を展望しているのである。

5 まとめと考察

本稿では、生活保護家庭のペルー系ニューカマー中学生3名の将来展望を「親子関係」と「重要な他者」の関係に注目して検討した。とくに子ども視点に立つことで明らかになったのは、将来展望の様相には少なくとも「親の日本語能力」を基礎に、親子関係の様相と学校外で獲得される資源の多寡——とりわけ「重要な他者」が作用していたことである。ここでは本稿を通じて得られた知見を整理・考察しながら、今後の課題を提示したい。

第一に、生活保護家庭で過ごすペルー系ニューカマーの子どもたちは、親の日本語能力の多寡（とくに子どもへの通訳依頼の程度）によって親子の役割逆転を経験しやすいことが明らかになった。前節で示したように、子どもへの通訳依頼とその実態についてはバリエーションに富んでおり、その様相は、通訳を要求しないものから(P1)、単に病院等の付き添いに象徴される通訳依頼(P2)、さらには通訳ではなく未払い賃金をめぐる日本人との交渉役(P3)にまで多岐にわたっていた。注目したいのは、対象とした子どもたち全員が親からの依頼を即座に断ることなく受容させていたことである。このことは、ペルー系ニューカマー家族を論じる際に「重要な他者」として家族——拡大家族・想定家族——が機能しているという田巻・スエヨシ(2015)の知見が改めて妥当であることを意味する。そしてこの文脈からいえば、本稿で示したように、「海外に在住する家族(P1)」だけでなく「教会の同年代のペルー人(P2)」は、子どもたちの将来展望を様々に切り開く重要な関

係的資源となっていたことが改めて指摘できる。その機能として特筆すべきは、こうした存在が子どもたちの二言語能力（スペイン語と日本語）に承認を与え、言語能力を強みにした将来展望の形成を強く後押ししていたことである。さらにP2の事例でみたように、こうした関係的資源の存在は、たとえ登校中断が生じるような通訳依頼によって親への葛藤が生じても、「自分の将来に向けた経験」として読み替えるよう作用することで、親子の役割逆転を回避する役割も果たしていたのである。

しかし第二に、ペルー系ニューカマー家族の親子関係が必ずしも安定的に維持され続けるとは限らなかったことから（P3）、「重要な他者」の意義を声高に強調するのは危険である。この点で本稿から得られた知見として重要なのは、通訳依頼を含め、親からの様々な要求が多岐にわたるにつれて、同じ学習支援教室に通う同年代のペルー人といった「重要な他者」の影響力が影を潜めていったことである。すなわち、親子の役割逆転が強く経験されていた事例（P3）では、単なる「通訳」を超えて要求される様々な役割——とくに未払い家賃・水光熱費をめぐる日本人相手への交渉役割——が、間違いなく「子どもにとっては」過大なものとして捉えられていったということであり、心理的負担感の強いこうした経験の積み重ねは、子どもにとっての家族が「拠り所」としてではなくむしろ「離脱」すべき場所として捉えられていくことと連動するのである。同じ学習支援教室に通う同じペルー人に触発されながら「通訳になりたい」と一面では考えながらも、そうした将来の選択肢を否定して早期就労が消極的に「選択」されていったのは、「重要な他者」という文脈を超えて、子どもが経験する「親子関係」が強く将来展望を「制約」していくことを意味する。そしてそのことは、早期就労へと水路づけられるブラジル系ニューカマー——「度重なる移動」と「学校での排除経験」の交差——との差異として、親子関係を基点にペルー系ニューカマーの子どものライフチャンスが早期から制約されていくという点で、大学進学をはじめ、教育に及ぼす貧困リスクの影響が注目されるべきことを示している。

ただし本稿の知見の解釈として断っておきたいのは、「子どもを頼りにする親たち」を決して批難することはできないということである。重要なのは、経済・言語面での貧困に加え、ペルー系ニューカマー家族が抱える関係面での貧困が一体となって「親が子どもにしか頼れない」という現象をもたらしているという理解である。こうしたペルー系ニューカマー家族のあり方がどれほど一般化されるかについては、ニューカマー家族の貧困や暮らし向きにまつわる全国調査データの展開可能性に待つほかはない。しかし、1・2節で検討したように、ペルー系ニューカマー家族にまつわる言語・経済・関係面での貧困を念頭に置けば、ペルー系ニューカマーの子どもたちが抱える複合的な貧困リスクは、ブラジル系ニューカマーとは改めて異質なものである必要があるのではないだろうか^{*10}。少なくとも親子の役割逆転に注目することで、ペルー系ニューカマーの子どもが家庭からの離脱とそのための手段として早期就労を消極的に「選択」していくという将来展望のプロセスを描いた本稿の意義は決して小さくないと思われる。無論、こうした将来展望の様相は、他のエスニック集団とも部分的に重なり合う点が多いと考えられるが、ニューカマーと貧困にまつわるエスニック集団間の比較検討については今後の課題としていきたい。

- *1 国勢調査のオーダーメイド集計において、「5年前に国外にいた者」を除いて算出されたもの。なお、2000年から2010年にかけて高校通学率格差は縮減し、南米系ニューカマーでも大学進学層が出現していることが示されている（高谷ほか、2015）。
- *2 本稿では、ひとり親家庭であり、さらに生活保護家庭に育つペルー系ニューカマーの子どもたちを対象とした事例研究を行う。しかしそのことは「経済面での貧困」に限定した分析を行うことを意味しない。近年では、こうした家庭に育つ子どもを剥奪された存在ではなく、能動的な主体として位置づけることによって子ども視点から家族の実像を捉える研究の必要性が指摘されている（志田、2015）。2節で論じるように、本稿ではペルー系ニューカマー家族が言語・経済・関係という様々な次元で貧困を経験している可能性を考慮して子どもの将来展望にアプローチする。
- *3 実際、ペルー系ニューカマーは工場労働においてもブラジル系ニューカマーの日本語能力を頼りに仕事内容を理解していたことが報告されており（田巻・スエヨシ、2015）、日本社会への参入障壁の高さは多々指摘されている（福田、2015）。
- *4 静岡県地域外交局多文化共生課HP参照（<http://www.pref.shizuoka.jp/kikaku/ki-140/toukei.html>, 2017年9月5日アクセス）。
- *5 なお大学進学には家庭の社会経済状況が強く表れることが計量研究を通じて実証的に明らかにされている（余田・林、2010）。
- *6 本稿では、子ども期に「個人を取り巻く周囲の人々の期待と評価」によって形成される自己イメージに取り分け重要な影響を与える人々を「重要な他者」と定義する（住田、2004: 101）。ライフコースに応じて「重要な他者」は変化するものの、本稿で示す子どもたちが口々に語ったのは、母親を含む「家族」、学習支援教室に通う「友人」、教会に通う「同国人」であった。とくに母親の存在が度々言及されたが、その背景には子どもたち全員が母子家庭であったことが強く影響していると考えられる。
- *7 F教室に通う子どもたちの人数や背景、X町の外国人登録者比率といった詳細な記述は、地域ならびに個人の特定リスクを考慮し一定の制約があることを断っておきたい。
- *8 子どもたちと一定の関係形成を経たうえで、休憩時間等の合間に筆者がニューカマーの子どもたちの将来に関心を寄せていることを伝え、聞き取りの了承を得た。
- *9 本稿で扱う中学生3名に限らず、ペルー系ニューカマーは血統的に「純粋な」ペルー人として語れない。対象とした3名の子どもたちは、幼い頃から自らの祖先を踏まえ自分たちには様々な「血」が入っていることを親たちから伝達されており、その事実を十分に受け止めながら状況に応じて「ペルー人」といった自己呈示を行っている点で共通する。このように、血統的な多様性のもとアイデンティティの選択肢に複数性が見られるペルー系ニューカマーの特徴を含意した包括的な概念として、本稿では「ペルー系ニューカマー」と定義して使用している。
- *10 本稿が外国人集住地域を対象としたことによって、地域の教会がP1やP2にとって重要な資源となり得ていたことは強調しておきたい。しかし外国人非集住地域の場合には、利用できる資源が少なく親子の役割逆転が加速することが示唆される。

《参考文献》

- ・ 浅野慎一、2009「中国残留日本人孤児に見る貧困——歴史的に累積された剥奪」『貧困研究』3巻、65～72頁
- ・ 大澤真平、2008「子どもの経験の不平等」『教育福祉研究』14号、1～13頁
- ・ 太田晴雄、2000『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院
- ・ 大曲由起子・樋口直人、2011「『移住者と貧困』を指標でみる」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』〈移住連ブックレット4〉移住労働者と連帯する全国ネットワーク、72～80頁
- ・ 小内透、2009「在日ブラジル人世帯の貧困」『貧困研究』3巻、57～64頁
- ・ 鍛冶 致、2007「中国出身生徒の進路規定要因——大阪の中国帰国生徒を中心に」『教育社会学研究』80集、331～349頁
- ・ 鍛冶 致、2011「外国人の子どもたちの進学問題——貧困の連鎖を断ち切るために」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』〈移住連ブックレット4〉移住労働者と連帯する全国ネットワーク、38～46頁
- ・ 梶田孝道・丹野清人・樋口直人、2005『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』

- ク』名古屋大学出版会
- ・ 国際協力事業団, 1992『ペルー国日系人実態調査報告書』
 - ・ 児島 明, 2008「在日ブラジル人の若者の進路選択過程——学校からの離脱／就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』1号, 55～72 頁
 - ・ 小西祐馬, 2003「生活保護世帯の子どもの生活と意識」『教育福祉研究』9巻, 9～22 頁
 - ・ 佐久間孝正, 2006『外国人の子どもの不就学——異文化に開かれた教育とは』勁草書房
 - ・ 志田未来, 2015「子どもが語るひとり親家庭——『承認』をめぐる語りに着目して」『教育社会学研究』96集, 303～323 頁
 - ・ 志水宏吉・清水睦美編, 2001『ニューカマーと教育——学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店
 - ・ 住田正樹, 2004「子どもの居場所と臨床教育社会学」『教育社会学研究』74集, 93～109 頁
 - ・ 高谷 幸・稲葉奈々子, 2011「在日フィリピン人女性にとつての貧困」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』〈移住連ブックレット4〉移住労働者と連帯する全国ネットワーク, 27～35 頁
 - ・ 高谷 幸・大曲由起子・樋口直人・鍛治 致・稲葉奈々子, 2015「2010 年国勢調査にみる外国人の教育——外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会科学部研究科紀要』39巻, 37～56 頁
 - ・ 田巻松雄・スエヨシ アナ編, 2015『越境するペルー人——外国人労働者, 日本で成長した若者, 「帰国」した子どもたち』下野新聞社
 - ・ 千年よしみ, 2011「生活に困難を抱える外国籍住民の状況——2009 年静岡県多文化共生アンケート調査の結果から」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』〈移住連ブックレット4〉移住労働者と連帯する全国ネットワーク, 49～57 頁
 - ・ 角替弘規, 2016「南米にルーツを持つニューカマー二世世代の青年期(2)——ペルーにルーツを持つ女性を中心に」『桐蔭論叢』34号, 47～57 頁
 - ・ 徳永智子, 2008「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望——『重要な他者』と『来日経緯』に着目して」『異文化間教育』28号, 87～99 頁
 - ・ 額賀美紗子, 2012「トランスナショナルな家族の再編と教育意識——フィリピン系ニューカマーを事例に」『和光大学現代人間学部紀要』5号, 7～22 頁
 - ・ 額賀美紗子・三浦綾希子, 2017「フィリピン系ニューカマー二世世代の学業達成と分岐要因」『和光大学現代人間学部紀要』10号, 123～140 頁
 - ・ 林 明子, 2016『生活保護世帯の子どものライフストーリー——貧困の世代的再生産』勁草書房
 - ・ 樋口直人, 2011「貧困層へと転落する在日南米人」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』〈移住連ブックレット4〉移住労働者と連帯する全国ネットワーク, 18～25 頁
 - ・ 福田友子, 2015「在日ペルー人移民コミュニティの特徴——統計資料の検討を通して」『千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』295巻, 71～98 頁
 - ・ Matsuda P. and Derek K., 2016「在日ペルー人児童生徒の教育問題と保護者の意識——神奈川県の日ペルー人保護者への質的調査」『上智大学教育学論集』50号, 67～81 頁
 - ・ 三浦綾希子, 2015『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ——二世世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房
 - ・ 三浦綾希子・坪田光平・額賀美紗子, 2016「フィリピン系ニューカマー二世世代のエスニック・アイデンティティ」中京大学国際教養学部編『国際教養学部論叢』9巻2号, 69～96 頁
 - ・ 宮島 喬・太田晴雄編, 2005『外国人の子どもと日本の教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会
 - ・ 柳田利夫, 1997「日系人から los nikkei へ」柳田利夫編『リマの日系人——ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店, 273～319 頁
 - ・ 柳田利夫, 2012「在日ペルー人の生活戦略——在日ブラジル人との比較を通じて」三田千代子編『グローバル化の中で生きるとは——日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』上智大学出版, 233～263 頁
 - ・ 山野上麻衣, 2015「ニューカマー外国人の子どもたちをめぐる環境の変遷——経済危機後の変動期に焦点化して」『多言語多文化——実践と研究』7号, 116～141 頁
 - ・ 余田翔平・林 雄亮, 2010「父親の不在と社会経済的地位達成過程」『社会学年報』39巻, 63～74 頁
 - ・ Foner, N., 2009, "Introduction: Intergenerational Relations in Immigrant Families," in Nancy F., ed., *Across*

Generations: Immigrant Families in America, New York: New York University Press, pp.1-20.

- Portes, A. and Rumbaut, R. G., 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: Russell Sage Foundation.
- Takenaka, A., 2004, "The Japanese in Peru: History of Immigration, Settlement, and Racialization," *Latin American Perspectives* 31 (3), pp.77-98.
- Takenaka, A., 2009, "Ethnic Hierarchy and Its Impact on Ethnic Identities: A Comparative Analysis of Peruvian and Brazilian Return-Migrants in Japan," in Tsuda, T. ed., *Ethnic Return-Migrations Around the World*, Dtanford, CA: Stanford University Press, pp.260-280.
- Takenaka, A. and Paerregaard, K., 2012, "How Contexts of Reception Matter: Comparing Peruvian Migrants' Economic Trajectories in Japan and the U.S.," *International Migration* 53(2), pp.236-249.
- Zhou, M. and Bankston III, C. L., 1998, *Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to Life in the United States*, New York: Russell Sage Foundation.

Future Prospects among Peruvian Newcomer Children Who Live in Households on Welfare:

Focusing on the Parent-Child Relationship and Significant Other

TSUBOTA Kohei

Polytechnic University

Key Words: Peruvian newcomer, poverty, future prospect

The objective of this paper is to explore how Peruvian newcomer children who live in households on welfare experience their family life and to what extent they aspire to go to college. The focus on Nikkei Peruvian newcomer children is due to the lack of previous studies compared with those on Nikkei Brazilian newcomer children. Although it has been observed that Japanese children who live in households on welfare feel comfortable with their family, can the Peruvian newcomer children also be described so? This study therefore analyzes their parent-child relationship through the cases of three Nikkei Peruvian children growing up in Japan in comparison to Japanese children. The data that form the basis of this research are based on fieldwork investigation. The results can be summarized as follows. Firstly, it is explained that Peruvian parents have low Japanese language ability and a parent-child role reversal is likely to occur in their daily life. In such a case, children are likely to look down on their parent and hope to leave home, which results in their decision to start working rather than aspiring to go to college. Secondly, “significant other” has a strong effect on not only comprehending the experience of role reversal positively but also providing a positive view of entering college in their future. In contrast, the lack of significant other leads to leaving home and a strong motivation to start working soon. There is a need to understand the difference between Brazilian and Peruvian newcomer children especially from the viewpoint of their linguistic, economic, and relational resources.